

季節のうつろいをガラスで楽しみたい

野中 いずみさん
(寿町在住)

季節ごとに生きる草花。その生命の美しさをガラスに刻み、インテリアとして楽しむ。今回は、サンドブラストを人生の励みにして、野中いずみさんを紹介します。平成元年、野中さんは仕事の関係で所沢に越してきました。このまちの人は人情があつて良い人が多い」と所沢の印象を話します。6年前、母が亡くなり遺品を整理していたときにサンドブラスト用のガラス10個を見つけた。「母に代わり、私が作る」。これがサンドブラストの出発点です。やってみると楽しく、すぐにのめり込んでいきました。サンドブラストとは、異なる色を重ねて溶着させた特殊な「被せガラス」に、絵の型紙であるマスクシートを貼り、エアコンプレッサーの圧搾空気で砂をガラスの表面に吹き付けながら彫刻するガラス工芸のことです。



白を基調にした部屋と調和している作品

野中さんの作品は、大好きな草花をコップや小皿、スタンドランプなどに彫刻したものです。作業は、花や葉などに微妙な段差をつけるため、シートを一枚がしては砂を吹き付けるといった細かい作業を繰り返します。これにより生まれた花や葉は、立体感があり、

ほろっ ところざわ 野老っ子



▲朝のうちはあいにくの雨。その後天気も回復し、いつもの熱気に包まれたところざわまつり。10月12日(日)/市内中央地区

みんなの広場



小手指町・SL公園

駅の北側には大型店舗や商店があり、とてもぎやかです。小手指駅は、昭和45年11月に開業しました。ほぼ同時に始まったのが北野土地地区画整理事業です。同事業は昭和52年に開業が完了し、同年「小手指町」が誕生しました。小手指ハイツの最初の1棟(S棟)が建ち、駅南口が開設されたのも同じ年です。市民プールのある北野公園には、同事業の竣工記念碑が建てられています。



小手指公園のデモイチ



北野公園に通つ竣工記念碑

在の入間市や狭山市にもかかるほど広大でした。ところで、小手指町の一角が区画整理以前に開拓されていたのをご存じでしょうか。第二次世界大戦後、戦地から引き揚げた人たちが旧所沢飛行場に開拓に入ります。昭和26年、その引き揚げ者の中から数世帯が分かれて北野の一角に入植しました。それが現在の小手指町の北側で、このときの入植地が「大字小手指」となりました。開拓当時の苦労話は、今も記録に残っています。入植当初は家も井戸も無く、旧所沢飛行場の開拓地から毎日2・5kmの道のりを歩いて開拓し、やっと家が建てられても2年間ほどラップによる生活だったといわれています。昭和39年、北野土地地区画整理事業の話が持ち上がり、開拓された土地もこの区画整理の中に取り込まれることになりました。小手指町二丁目には、D51形蒸気機関車(デモイチ)が展示され、SL公園として知られている小手指公園があります。小手指町が誕生した年に開設した公園ですが、この辺りはちょうど開拓で入植した人たちの移り住んだ場所でもあります。

このデモイチは、北海道を走り続けた蒸気機関車です。この夏、全面的に塗り替えられましたが、小手指町の歴史にはデモイチのような力強い歴史があったのです。



▲「継続は力なり!」。日ごろの練習の成果を発揮した「第4回所沢市陸上競技選手権大会」。10月13日(祝)/早稲田大学所沢キャンパス

街かど スマイル

▶皆さんからの「街かどスマイル」情報を募集▶採用者には事前に連絡します▶「誰でもエッセイ」ではテーマにそった投稿を募集▶はがきに300字以内▶文章は添削あり▶掲載者には記念品を進呈▶次回のテーマは「温泉」▶温泉には季節ごとに味わえる贅沢があります▶のんびりと温泉につかりながら紅葉や雪景色などを眺めていると、心身ともに癒されます▶皆さんの温泉にまつわる体験談や思い出話を教えてください▶締め切りは11月12日(必着)▶住所・氏名・年齢・電話番号を明記▶送り先: 〒359-8501・並木1-1-1 所沢市役所秘書広報課「みんなの広場」係



▲無言・鋭い眼光。頭の中では将棋コンピュータがフル稼働しています。「とうきち将棋大会」。10月19日(日)/市役所8階・大会議室

ふれあい館「エコ回」不用品ガイド

- 譲ります ▶A型ベビーカー▶家具調こたつ▶テーブルといす(4脚)のセット▶カメラ▶男の子用スーツ▶子ども用マウンテンバイク▶座卓▶羽毛布団▶厚手の毛布▶竹製カーペット▶百科事典27巻▶カウチソファ(2人用)▶ポータブルトイレ▶米びつ▶双子用縦型ベビーカー▶もちつき機▶パイプベッド▶テーブルクッカー
 - 求めます ▶FAX付きコードレスホン▶小型耕運機▶ブッシュホン▶女子剣道着▶介護用ベッド
- 受付方法 電話による先着順で紹介いたします。
休館日 月曜日、祝休日
◎11月15日(土)・16日(日)は臨時休館します。
申し込み・問い合わせ リサイクル
ふれあい館 ☎994-5374・FAX994-1118

どこどこ 町内会めぐり

私たちの自治会は、昭和55年に新郷自治会として発足しました。その後、区画整理事業に伴う町名変更によって、東所沢二丁目となり、現在に至っています。町内には、市内でも珍しい連棟式低層の団地「タウンハウス」もあり、美しい家並みが見られます。大多数の会員が市外から越されてきたため、夏祭りを開催し、隣人との和を図っています。昼には、子ども神輿が町内をめぐり、夕方からは、すべて手作りの各種模擬店と盆踊りによって、自治会最大のにぎわいを見せています。また、当自治会で始めた元旦マラソン大会は、東所沢地区の行事にまで発展しました。平成元年からは「自治会ニュース」を月1〜2回発行してきました。その結果、平成9年に「優良自治会賞」をいただきました。さらにこの年、「花



花を植える作業に励む皆さん

いっぱいの会」を立ち上げ、市の「花と緑のオアシスづくり推進事業」と協力し、東川に沿った河畔に花を植えました。季節ごとに見事な花が咲き、散策路として、花見の宴の場として、会員の皆さんに利用されています。こうした会員の皆さんの努力が実を結び、本年度「所沢市環境推進活動功労表彰」も受賞しました。これからも、このまちを「私のふるさと」と胸を張って言えるよう、住み良いまちづくりを続けていきたいと考えています。

「サマ」が苦いのか、じょうじはどうか。」「三陸の漁港にサンマ水揚げ」というテレビのニュースに、台所仕事をやめて見入る。故郷の漁港に脂ののった鮭やかなづなが水揚げされている。二ノ宮はすでに次の映像へと移ったが、脳裏には水揚げされたサンマが競りかき、脂がにじみ出てくる。あの小さな町がまた見える時季である。新鮮なサンマの味は格別である。生づばが出る。故郷のサンマが食べた。翌日、弟からサンマが届いた。故郷のサンマである。」「サマ」が苦いのか、じょうじはどうか。」「心」を思う。

中央アルプスの雄姿 和ヶ原・香坂 彪
「故郷はどこですか?」と聞かれて困ったことが多い。幼少期、転勤族の父とともに各地を転々とした。おらかな北海道に郷愁は感じられるけれども「故郷」とはいえない。青壮年期は、根無草が寄り集まったような東京のある町で過ごした。縁がある。35年前所沢に越してきた。以来、人生で最も長く住まう地となった。娘はここで育ち、嫁に行き、今は孫を連れて里帰りして来る。「ここが住みかだね」と妻と話しながら、所沢での生活を楽しくしている。「故郷は?」と尋ねられたら、私は今「所沢です」と答えている。

津 北秋津・小針 初美
日本一短い駅名として有名な「津」で生まれ、大学生生活そこで終え、青春時代のすべてが津に埋まっている。帰省の際、名古屋までは新幹線なので特別の思いは無いが、そこで在来線に乗り換えるとき、体の奥底から安んじ感が吹き出し、五感が緩んでしまう。駅名の一つ一つが懐かしく響く。「一昨年、帰省の折に弟と2人だけで生まれ育った家の跡地の辺りを、40年ぶりに記憶をたどるながら歩いた。幼なじみの友人・知人とは不思議なものだ。名前はもちろん、名字までもが鮮明に飛び出し、あだ名もおまけについて出る。「伊勢のな言葉」といわれるお国なりと、独特のイントネーションに身も心も溶けてしまっただろう。」「心」を思う。

美(み)ことば(ことば) 中井井・田代 玉子
瀬戸内海の島に、80年前産声を上げた。白砂青松、美しい大三島が私のふるさとです。思ふ存分遊んだ子どものころを思い出すと、私の心は幼女に戻ります。情景を反すうしつつ、楽しいひととき、学校・先生・友達、みんな走馬灯のごとく脳裏を駆け巡ります。昭和初期、瀬戸内の海のように人の心は穏やかで、平和でした。夕日が島の背に沈むころになると、小舟は櫂をききませ、小波をたてながら家路へ急ぎ、家では夕食の支度で苦屋から煙が立ちのぼっていた静かな美しいふるさと。第一の住みかとして選んだのが当地です。海が足りない不満はありませんが、日本一の富士山が眺望できます。朝は紅富士、冬は雪富士寺、四季折々の姿に楽しい毎日を送っています。第二のふるさと「所沢」の美しさを守って暮らしています。

見(み)ことば(ことば) 下安松・川北 肇
「故郷はどこですか?」と聞かれて困ったことが多い。幼少期、転勤族の父とともに各地を転々とした。おらかな北海道に郷愁は感じられるけれども「故郷」とはいえない。青壮年期は、根無草が寄り集まったような東京のある町で過ごした。縁がある。35年前所沢に越してきた。以来、人生で最も長く住まう地となった。娘はここで育ち、嫁に行き、今は孫を連れて里帰りして来る。「ここが住みかだね」と妻と話しながら、所沢での生活を楽しくしている。「故郷は?」と尋ねられたら、私は今「所沢です」と答えている。

心の支え 松葉町・永田 とし子
ふるさとを離れて33年。田舎に住んでいたのは、高校を卒業するまでの18年間だけだったのに、いまだに夢に現れるのは田舎の風景。登場人物は今の人たちのなかに、背景はいつも故郷で不思議に思っている。緑に広がる田んぼや縁側から見える景色などは、夢とあまり変わることもなく、今も同じ自然を保っているのがうれしい。9年前、岐路に立たされたとき、「帰っておいで」と声をかけてくれた姉が家を離れていて、いつまでも温かく迎えてくれるのもありがたい。

誰でも エッセイ

テーマ ふるさと

